

## 疎外の経済学的展開に関する一試論

佐藤 俊 二

「疎外された労働」(die entfremdete Arbeit) の概念およびその展開こそは、『経済学・哲学手稿』の核心をなすものである。かくして、疎外された労働の概念把握は、「初期マルクスの研究」における最重要部分を構成している。<sup>(1)</sup>特に、疎外された労働の経済学的意義をめぐる問題は、『資本論』で結実するにいたる、マルクスの経済学説の形成過程を解明するうえでも、重要な素材を提供するものである。<sup>(2)</sup>

小稿は、この疎外された労働の経済学的意義を、賃労働論の視点から検討しようとするものである。その際、後述するように、ローゼンベルグの疎外論を一つの手がかりとして、疎外の経済学的展開、すなわち賃労働論としての展開方法とその意義を探ろうとするものである。

なお、小稿の出発点は、賃労働の本質を労働力商品に解消してしまう、換言すれば賃労働論を事実上剰余価値理論に環元してしまう理論への疑問にある。<sup>(3)</sup>

- (1) 疎外された労働の概念をめぐる諸研究を概観したものとしては、細見英氏の労作「〈疎外された労働〉の概念(一)(二)」(立命館大学経済学会『立命館経済学』第9巻第1号、第2号)がある。
- (2) 疎外された労働の経済学的意義を特に論じたものとしては、遊部久蔵「疎外論の経済学的意義」(『三田学会雑誌』第52巻)がある。なお、遊部氏は疎外された労働の概念をマルクス価値論の成立史上からその意義を検討しているが、結論としては否定的見解を示しておられる。
- (3) もっとも、剰余価値視点を放棄してしまった、いわゆる労働経済論・労働市場論は論外である。同様に、賃労働論を疎外論に解消してしまう理論とも、本稿は無縁である。

## I

マルクスが、『経済学・哲学手稿』で設定した一方の中心課題は、スミスをはじめとする「国民経済学」(die Nationalökonomie)の継承と批判であった。<sup>(4)</sup>したがって、疎外された労働の概念は、マルクスによる国民経済学への批判の理論的武器であったといえよう。

それでは、『経済学・哲学手稿』において、マルクスの国民経済学にたいする批判は、いったいどこにあったのか。マルクスは、国民経済学の諸前提にしたがって「労賃」、「資本の利潤」、「地代」と分析をすすめたあとで、国民経済学の特質を次のように摘出している。「国民経済学は私的所有の事実から出発するが、これをわれわれに解明しない。それは私的所有が現実のなかで経る物質的過程を、一般的な抽象的な諸方式に表現する。するとこれらは国民経済学にとって諸法則と見なされる。それはこれらの法則を理解しない、すなわち、これらがどのようにして私的所有の本質から生じるかを証明しない。<sup>(5)</sup>すなわち、国民経済学が私的所有(Privateigentum)を自明なものとして前提し、「それが(国民経済学——引用者)説明すべきところのものをそれは前提している」ことに、マルクスの批判の矢がむけられているのである。<sup>(6)</sup>かくしてマルクスは、国民経済学にあっては自明の前提であった私的所有の解明を課題としたのであった。そしてマルクスは、この私的所有の解明を疎外された労働にもとめたのである。

私的所有と疎外された労働との関係は、相互作用のそれである。すなわち、私的所有は疎外された労働の原因であるとともに、疎外された労働は私的所有の原因(「疎外された労働の結果として生じたところの私的所有」)である。<sup>(7)</sup>マルクスは、私的所有と疎外された労働との相互作用を次のように表現している。「われわれは、たしかに外化された労働 die entäußerte Arbeit (外化された生活)の概念を国民経済学から、私的所有の運動からの結果と

して獲た。しかしこの概念の分析にさいして明らかになることは、たとえ私的所有が外化された労働の根拠として、原因として現われるにしても、それはむしろその帰結なのであって、ちようど神々もまた根源的には人間の知性の迷いの原因ではなくて結果であるのと同様だということである。のちになるとこの関係は、相互作用<sup>(8)</sup>に変わる。」

ところで、疎外された労働とはなにかということについて、マルクスは以下の4つの規定を与えている。すなわち、(1)労働生産物の疎外、(2)労働の疎外、(3)類（Gattung）の疎外、(4)人間の疎外、である。そこで、この4規定の内容について、マルクスの展開にしたがって簡単に叙述しておこう。

### (1) 労働生産物の疎外

マルクスは、労働者の疎外（Entfremdung）、外化（Entäußerung）の一面として労働生産物の疎外を把握した。労働者はより多くの富を生産すればするほど、それだけいっそう貧困になる。労働の対象化である労働の生産物が、労働にたいして、ある疎遠なもの（ein fremdes Wesen）として、生産者に依存しない力として立ち向う。労働者がより多く諸対象を生産すればするほど、彼はそれだけいっそう少なくしか所有しえず、それだけいっそう多く彼の生産物、つまり資本の支配のもとにおちいる。労働者は生活の対象ばかりではなく、労働対象をも剥奪される。「労働の実現が現実性剥奪として現われるはなはだしさは、労働者が餓死するくらい現実性を剥奪させるほどである。対象化が対象の喪失として現われるはなはだしさは、労働者が最も必要な諸対象を、ただ生活の対象だけでなくまた労働対象をも、奪<sup>(9)</sup>われているほどである。」

対象化が対象の喪失となる、対象化が対象の奴隷となる、労働の対象化である労働の生産物が労働にたいして疎遠なものとなる、労働の対象化が生活の対象ばかりではなく労働対象をも剥奪する、——労働生産物の疎外におけるこの敵対的性格は、つぎのような過程のなかで発現する。すなわち、労働者がその「生活手段」を二重の方向に奪われることによって。第1に、労働

者が感性的自然をわがものとすればするほど、それは労働者の労働に所属する対象、「労働の生活手段」（生産手段）たることをやめ、第2に、ますます労働者の「直接的意味での生活手段」（生活手段）たることをやめる。かくして、労働者は二重の方面に自分の対象の奴隷となる。「こうした奴隷状態の頂点は、彼はわずかにただ労働者としてのみ肉体的主体としておのれを保ち、わずかにただ肉体的主体としてのみ労働者であるということである。」<sup>(10)</sup>

## (2) 労働の疎外

疎外された労働は、生産の結果として発現するばかりではなく、生産行為のなかで、生産しつつある活動そのものの内部で現われる。生産物は生産のいわば要約であり、したがって労働生産物の疎外は、実は生産そのものの活動的外化、労働の疎外の一帰結にほかならない。それでは、労働の疎外とはなにか。労働が労働者にとって外的（*äußerlich*）であること、これである。

労働は、自由意志的なそれではなく、強制されており、いわば強制労働（*Zwangsarbeit*）である。労働は労働者の本質的活動ではなくなり、なんら自由な肉体的および精神的エネルギーを発展させない。したがって労働者は、労働の外で（*außer Arbeit*）やっと自分のもとにいる感じがし、労働のなかでは（*in der Arbeit*）自分の外にいる感じがする。労働は、ある要求の充足ではなく、その他の諸要求を充足するための一手段にすぎない。

労働はもはや、労働者に属していない他人のものである。労働者の活動はその自己活動たる地位から、他人に所属する活動に転落する。いわば自己喪失（*Selbstentfremdung*）なのである。その結果、人間はわずかにただその動物的諸機能において、自分を自由活動的と感じるにすぎず、他の人間的諸機能においては自分をもはやただ動物としてしか感じないようになる。「動物的なものが人間的なものとなり、人間的なものは動物的となる。」<sup>(11)</sup>

## (3) 類（*Gattung*）の疎外

労働の疎外、労働生産物の疎外は、人間から類を疎外せしめる。「人間は類的存在（*Gattungswesen*）である、というのは、人間が類を、人間自身の

類をもその他の事物の類をも、実践的および理論的に人間の対象にするからというだけでなく、むしろ、——そしてこれはただ同じ事柄にたいするもう一つ別な表現にすぎないが——むしろまた、人間は自分自身にたいして現在の生きた類にたいしてのようにふるまうからでもあり、自分自身にたいして、ある普遍的な、それゆえに自由な存在にたいしてのようにふるまうからである。<sup>(12)</sup>生活活動のしかたのなかに類的性格がふくまれており、自由な意識的な活動が人間の類的性格である。動物はその生活活動と直接に一つである。動物はその生活活動と区別されない。これに対して、人間は意識的な生活活動をもっている。意識的な生活活動が人間を動物的生活活動から直接に区別する。まさしくこれによってのみ人間は一つの類的存在である。

ある対象的世界を実践的に生み出すこと、非有機的な自然に労働を加えることは、人間が一つの意識的な類的存在としての実を示すことである。動物もまた生産するが、しかしそれは一面的に——ただ直接的に自分にとって、ないしは自分の仔にとって必要とするものだけ——生産するにすぎない。これにたいして人間は普遍的に生産する。動物はただ直接的な肉体的要求にもとづいてのみ生産する。ところが人間は、肉体的要求にせまられないでも生産するし、むしろ肉体的要求から自由なばあいにこそ真実に生産する。動物はただ自分自身だけを、だが人間は全自然を生産する。かくして人間は、対象的世界の加工形成のなかではじめて現実的に、一つの類的存在としての実を示す。したがって労働の対象は、人間の類的生活の対象化されたものにほかならない。

人間からその生産の対象を奪い取る疎外された労働は、こうして人間からその類的生活を、現実的な類的対象性を奪い取ることを意味する。同様に、疎外された労働は、自己活動、自由な行動を手段に引き下げるのだから、それは人間の類的生活をその肉体的生存の手段にしてしまうものである。

#### (4) 人間の疎外

人間がその労働の生産物から、その労働から、その類的存在から疎外され

ているということの、一つの直接的帰結はなにか。それは、人間からの人間の疎外である。人間がその労働にたいし、その労働の生産物にたいし、人間自身にたいする関係についてあてはまることは、人間がその対極としての他の人間にたいし、また他の人間の労働とその対象とに対する関係についてもあてはまる。人間からその類的存在が疎外されているということは、ある人間が他の人間から疎外され、人間的本質から疎外されている、ということなのである。

それでは、労働者に対立している人間とはなにか。資本家、これである。「こうして、疎外された、外化された労働によって労働者は、労働に疎遠な、労働の外に立っている人間の、この労働にたいする関係を生みだす。労働者が労働にたいする関係は、資本家（あるいはそのほか労働の主人がどう呼ばれようと）が労働にたいする関係、を生みだす。私的所有はこうして、外化された労働の、すなわち労働者が自然および自己自身にたいする外的関係の、所産であり、結果であり、必然的帰結である。<sup>(13)</sup>」

なお、ここで付言しておくべきことは、これら疎外された労働の4つの規定は、単に羅列されたものではないということである。マルクスは、それらを相互に有機的なつながりをもったものとして考察しているのである。すなわち、これら疎外の、いわば基軸に位置するのは、労働の疎外である。マルクスは、疎外された労働の概念をほかならぬ国民経済学の結論のなかから引き出した。しかし国民経済学は、その現象形態を叙述しただけで、その本質を解明できなかった。それは前述した如く、私的所有を自明のものとして前提し、与件として絶対化した国民経済学の必然的帰結であった。同時に国民経済学は、人間（労働者）と生産とのあいだの直接的関係を考察しなかったがために、生産行為それ自体に隠されている疎外された労働の本質をみいだせなかった。これに対してマルクスは、生産過程そのものを検討することによって、そのなかに労働の本質、労働の疎外を発見した。

前述した如く、労働生産物の疎外は、労働の疎外の一帰結である。そして

これらの疎外は、類の疎外、人間の疎外へと発展する。<sup>(14)</sup> それらの相互関係を明らかにし、それらを総括的に考察することによって、マルクスは私的所有と疎外された労働の本質を把握しようとしたのである。

- (4) いうまでもなく、ここでの「国民経済学」とは「古典派経済学」をさす。
- (5) K. Marx, Ökonomisch-philosophische Manuskripte, Reclams Universal-Bibliothek Band 448, S. 150. 藤野渉訳『経済学・哲学手稿』, 国民文庫, 96頁。
- (6) Manuskripte. S. 150. 前掲訳本, 97頁。
- (7) Manuskripte. S. 163. 前掲訳本, 116頁。
- (8) Manuskripte. S. 162. 前掲訳本, 114頁。
- (9) Manuskript. S. 99. 前掲訳本, 98—99頁。
- (10) Manuskripte. S. 153. 前掲訳本, 101頁。
- (11) Manuskripte. S. 155. 前掲訳本, 103頁。
- (12) Manuskripte. S. 156. 前掲訳本, 104頁。
- (13) Manuskripte. S. 162. 前掲訳本, 113—114頁。
- (14) 労働疎外論を唯物史観形成の問題として論じたものとしては、重田晃一「労働疎外論と唯物史観」(経済学史学会編『「資本論」の成立』岩波書店, 1967, 所収)が参考となる。

## II

デ・イ・ローゼンベルグは、その著『19世紀40年代におけるマルクスとエンゲルスの経済学説の発展の概説』のなかで、『経済学・哲学手稿』における私的所有と疎外された労働に関する分析は、後にマルクスが『資本論』第1巻第7篇第22章で叙述するにいたる、「商品生産の所有法則の資本制的領有の法則への転回」(Umschlag der Eigentumsgesetze der Warenproduktion in Gesetz der kapitalistischen Aneignung)の萌芽である、と示唆している。すなわち、「なるほど、マルクスも、私的所有について述べるにあたって、まず小生産者の所有と資本主義的所有とを区別してはいなかった。し

かし、どのようにして私的所有が、労働を生産者から疎外しつつ、それ自身変容して（より正確に言えば、そのなかに伏在している敵対的本質を展開して）、私的所有によって疎外された労働の生産となったかをしめしたマルクスは、この分析によってすでに、両者を区別するところのものをはっきり特徴づけている。一般的に言えば、マルクスはすでに右の分析によって、『資本論』第1巻第22章で古典的に叙述されている『商品生産の所有法則の資本主義的取得の法則への転化』という理論に、まさに到達しかかっているのである。<sup>(17)</sup>

それではいったい、ローゼンベルグは、『手稿』のいかなる点に資本制的領有法則の転回の萌芽をみいだすのであろうか。しかしローゼンベルグは、この重大な示唆にもかかわらず、その根拠について必ずしも明確な叙述をしてはいない。それはあくまでも、単なる「示唆」ととどめているにすぎない。ローゼンベルグは、マルクスにしたがいつつ、疎外された労働の概念の内容と形態とを断片的に叙述しているだけである。疎外された労働と資本制的領有法則の転回との内的関連について分析してはいないのである。

とはいえ、ローゼンベルグは、断片的ながら『手稿』のなかから、いくつかの独自の結論を引きだしている。そこでわれわれは、それらを一応整理してみるなかで、換言すればローゼンベルグ自身の疎外された労働の理論を摘出するなかで、かの示唆の意味を解明する糸口を見出さねばならない。

まず、結論の一つを先取りするというならば、ローゼンベルグは、『手稿』におけるマルクスの疎外された労働の概念は、事実上賃労働を意味するものであるとみているのである。したがって、マルクスがここで念頭においている私的所有は、「私的所有のブルジョア的形態」、「私的所有一般ではなくて、賃労働を生みだしつつそれ自身賃労働によって生みだされる私的所有、すなわち資本主義的私的所有」であるとみているのである。<sup>(18)</sup>

しかし同時に、ローゼンベルグは、先の引用文にもみるように、『手稿』におけるマルクスが私的所有を分析するにあたって、小生産者的な所有と資



本制的所有とを区別していなかったことをも指摘している。したがってマルクスは、疎外の過程が「さまざまな経済的構成体でどのようにすすみ、どういう形態をとるかということ、まだ研究していない。だいいち、経済的構成体にかんする学説を、マルクスは当時まだ仕あげておらず、したがって個々の構成体の特殊性はまだ明らかにされえなかったのである。<sup>(19)</sup>」こうして、マルクスの疎外された労働の概念規定は、あらゆる「階級的社會構成体」に共通な特徴づけを包摂するものとなる。それにもかかわらず、ローゼンベルグはマルクスの疎外された労働の概念のなかに、私的所有一般と資本制的私的所との特徴づけをみいだすのである。

それではローゼンベルグは、疎外された労働のいかなる点に、資本制的私的所の特質を、あるいは資本制的領有法則の転回をみるのであろうか。ローゼンベルグは、疎外された労働生産物の概念的・経済的内容を規定するものとして、以下の3つの契機をあげている。<sup>(20)</sup>すなわち、(1)労働者は労働生産物をうばわれる、(2)労働生産物は、労働者に無縁な物的世界として対立する、(3)労働生産物は労働者を隷属させる、である。そして、最初の2つの規定における労働生産物の疎外は、古代社会でも封建社会でも生じた。そこでも労働生産物は、その直接的生産物である奴隷や農奴から取りあげられ、彼らには無縁で敵対的な、そして彼らの抑圧者・搾取者に属する物的世界として、彼らに対立していた。だから、労働者からの労働生産物の疎外の過程であられる私的所の支配は、あらゆる敵対的な「階級的社會構成体」に共通である。しかし、最後の規定こそは、すなわち労働生産物が労働者を「隷属」させることこそは、疎外された労働生産物をまさに資本たらしめるものであり、資本制的社会に固有のものである、というのである。

以上からわかるように、ローゼンベルグは、なによりも労働生産物が労働者を「隷属」させるという点に、資本制的私的所の特質を、換言すれば資本制的に疎外された労働の本質を求めらるのである。

前述したように、ローゼンベルグの見解によれば、マルクスが『手稿』で

使用している私的所有の概念は、実際には、資本制的私的所有を念頭においたものであり、疎外された労働＝賃労働である。そこで次に問題となるのは、ここでマルクスが使用している資本の概念である。ローゼンベルグは、当時のマルクスにおける資本概念の制約性について以下のように説明している。たしかにマルクスは、「資本とは、労働者には無縁で敵対的な力として、しかも労働者を支配して彼らを隷属化する力として労働者に対立する、蓄積された他人の労働である」という一般的な規定は与えている。<sup>(21)</sup>「しかしどのようにして資本が、労働を隷属させ搾取することによって、自己増殖する価値に転化するかという問題にたいしては、まだ答がない。」<sup>(22)</sup>

ローゼンベルグがここで指摘している、当時のマルクスにおける資本の概念規定の制約性は、資本制的領有法則の転回との関連で疎外された労働を考える場合に重要である。なぜなら、資本制的領有法則の転回は、まさに価値・剰余価値理論を前提として成立する理論だからである。マルクスは、価値・剰余価値理論の未確立の段階で、疎外された労働の概念を展開しているのである。それにもかかわらず前述した如く、ローゼンベルグは『手稿』に、つまり疎外された労働の概念に資本制的領有法則の転回の萌芽をみているのである。しかも、それにたいする説明がない。

こうみてくると依然として、ローゼンベルグのかの示唆は、矛盾した根拠のない強弁の如く思える。われわれは更に、ローゼンベルグの疎外された労働概念への理解を吟味していかなければならない。

労働生産物の疎外における資本制的形態の特徴は、ローゼンベルグによれば労働者の労働生産物への「隷属」であった。そしてこれこそ、疎外された労働生産物が「最高の発展をとげて、資本——資本主義的生産様式に特有でそれにふさわしい、私的所有の支配のこの形態——となる」ものにほかならない。<sup>(23)</sup>剰余価値理論をいまだわがものとしていなかった当時のマルクスは、資本を労働者からの労働生産物の疎外の結果として把握するとともに、資本を「労働者にきわめて敵対的な、そして彼らにとって破滅的な力として自己

を発現する」ものとして考察している。<sup>(24)</sup>

この敵対的な、破滅的な力としての労働生産物＝資本は、経済的に労働者を奴隷化するばかりではなく、道徳的にも労働者を押しつぶす。この過程は経済的には、二重の側面から生活手段をうばうことによって。すなわち第一に、感性的な外界がますます労働者の労働の生活手段ではなくなり、第二に、それはますます、労働者の肉体的生存のための手段ではなくなる。道徳的には、労働者の対象が文明的になればなるほど、労働者は野蛮になる。

それでは、労働者の労働生産物への敵対的なこの「隷属」は、どのようにして発生するのか。ローゼンベルグは、マルクスの次の叙述に注目する。「だが、疎外はただ生産の結果のなかで現われるばかりでなく、生産の行為のなかで、生産しつつある活動そのものの内部で現われる。もし労働者が生産の行為そのもののなかで自分を自分自身にたいして疎外しないとしたら、どうして彼は彼の活動の、生産物にたいして疎遠に立ち向かうことがありえようか？ 生産物は、じっさいただ、活動の、生産の、要約にほかならない。……労働の対象の疎外のなかに要約されているのは、労働の活動そのもののなかでの疎外、外化、にほかならない。」<sup>(25)</sup>かくして、ローゼンベルグは、こう結論する。すなわち、労働生産物の疎外は、生産そのものの領域で、しかも生産過程が開始される以前にすでに労働が売られ疎外される結果として生じるものである。労働生産物の疎外は、労働そのものの疎外の不可避的な結果なのである。<sup>(26)</sup>もちろん、当時のマルクスには労働と労働力（Arbeitskraft）または労働能力（Arbeitsvermögen）との区別はなかった。<sup>(27)</sup>したがって、『手稿』のマルクスにあっては、資本と労働との交換は労働力の売買ではなく、労働そのものの売買であった。マルクスは、労働そのものが売買されると考えていたのである。しかし、ここでローゼンベルグが強調しようとするのは、別のことである。<sup>(28)</sup>マルクスはこうみていた、「彼（労働者一引用者）の受けとる賃銀は、けっしてその等価物ではありえない。」、これである。これは、等価物を受けとる「普通の販売」（商品の販売）とは異なる

る、いわば不等価交換なのだ、と。なぜなら、マルクスは人間の貴重さは、貨幣や商品であらわすことができないと考えていたが、ブルジョア社会では、労働者がその労働を販売するにあたって、労働者が一定額の物に帰せられてしまう。こうしてマルクスは、商品の売買とは異なる交換に、つまり労働の売買過程にも、疎外された労働を発見していた。労働生産物の疎外は、生産過程における労働の疎外ばかりではなく、それ以前の労働の売買過程（流通過程）における労働の疎外の結果なのである。

最後に、生産過程における労働の疎外とはなにか。ローゼンベルグは、まずマルクスの労働観を前面におしだして、それとの比較のなかで、この間に答えようとする。

マルクスによれば、労働は創造的な行為であり、そのなかで勤労者は一定の人格として自己を確立し、またそのなかで、彼の肉体的および精神的エネルギーを発現するだけでなく発展もする。ほかならぬ労働においてこそ、人間は最も完全で実り豊かな生活をする。しかしこうしたことは、「自由な労働にだけ固有なことであって、けっしてその反対物である賃労働、疎外された労働には固有ではない。」<sup>(29)</sup>すなわち、対象的な世界を実践的に生み出す労働は、人間を一つの意識的な類的存在たらしめるものである、というマルクスの労働観—「人間は意識的な生活活動をもっている。……意識的な生活活動が人間を動物的生活活動から直接に区別する。まさしくこれによってのみ人間は一つの類的存在である。」<sup>(30)</sup>——の資本制的生産過程におけるその現実的否定にこそ、労働の疎外をみるわけである。

かくして、労働の疎外の内容とその発現形態は、第一に、労働が人間の内的欲望であることから、労働のそとで欲望を充足するための単なる手段に転化することに、第二に、強制がやむとたちまち疫病のように労働が避けられることに、あらわれる。「労働者はもはや自分と自分の労働を処理できない。それは他人によって処理され、労働者はこの他人の意志と力に従属するのであって、このことが労働を強制的な、非自発的な、奴隷的なものにするので

ある。ところでこのことはまた、労働者の労働が、そのなかで彼がみずから確立するような彼の活動ではなくなる、ということの意味する。彼の活動は彼にとって自己喪失である。労働の疎外の発現形態は、労働が呪咀として、また、貧困にたいする罰、労働しないでは生活の欲望を満たす手段をもたないことにたいする罰としてあらわれる、ということである。<sup>(31)</sup>

われわれはいままで、断片的に散在しているローゼンベルグの疎外論を、いくつか拾いあげてきた。ここで、問題をはじめに戻そう。いったいローゼンベルグは、『手稿』の疎外された労働の概念のなかに、資本制的領有法則の転回の萌芽をみるにいたる、経済学的展開のいかなる端初をみいだすのであろうか。

前述した如く、ローゼンベルグは随所に疎外された労働の本質として、その階級的内容——敵対的性格——を強調している。そして実はこの点にこそ、疎外された労働のまさに資本制的特質をみいだしていた。この敵対的性格——「隷属」——こそは、資本を資本たらしめるものであった。ローゼンベルグは、制約されたものであるとはいえ、マルクスの資本の規定のなかに、蓄積された他人の労働を引きだした。これを可能にするのは、いうまでもなく、一方における他人の労働の領有、他方における自己の労働の喪失、とが同時的に存在しなければならない。しかも、疎外された労働＝賃労働は、この敵対的関係を再生産するものであった。だから、ローゼンベルグはいう、マルクスが念頭においていたのは、私的所有一般ではなく、賃労働を生みだしつつそれ自身賃労働によって生みだされる私的所有、すなわち資本制的私的所有である、と。

ローゼンベルグの疎外論の一つの特徴は、マルクスが『手稿』であげている疎外された労働の4規定を前二者にすべて収斂させていることである。その真意はともかくとして、類の疎外、人間の疎外をまずもって、資本制的生産との直接的関連のなかで把握しようとするローゼンベルグのこの方法は、賃労働の本質を考えるうえで示唆に富んだものとみることができよう。なぜ

なら、それは資本制的生産の矛盾を、単にその結果としての貧困の問題との関係でとらえるのではなく、資本の支配力のもとでの隷属的労働との関係で理解する方法に結びつくと思われるからである。

以上かえりみて、臆断をおそれず一言にしていえば、ローゼンベルグは、マルクスの疎外された労働の概念の経済学的表現として、資本蓄積論の端初的表現を発見していたのではないだろうか。たしかに、こうみると、『手稿』に資本制的領有法則の転回の萌芽をみるというかの示唆も、一応肯定的に理解しうるのである。

- (15) Д. И. розенберг 《Очерки развития экономического учения Маркса и Энгельса в сороковые годы XIX века》, Москва, 1954 г. 副島種典訳『初期マルクス経済学説の形成』上, 下, 大月書店, 1971年改訳版。
- (16) der Umschlag は「転化」, 「転変」, die kapitalistische Aneignung は「資本制的取得」とも訳しうるが、小稿では、使用する関連文献の訳語との関係から、便宜的に「転回」, 「資本制的領有」に訳語を統一した。
- (17) ローゼンベルグ『初期マルクス経済学説の形成』（上巻）, 185頁, 注(1)。
- (18) ローゼンベルグ, 前掲訳本, 185頁。
- (19) ローゼンベルグ, 前掲訳本, 173-4 頁。
- (20) ローゼンベルグ, 前掲訳本, 173頁。
- (21) ローゼンベルグ, 前掲訳本, 174頁。
- (22) ローゼンベルグ, 前掲訳本, 174頁。
- (23) ローゼンベルグ, 前掲訳本, 174頁。
- (24) ローゼンベルグ, 前掲訳本, 174頁。
- (25) K.Marx, Ökonomisch -Philosophische Manuskripte, S. 154. 前掲訳本, 102頁。
- (26) ローゼンベルグ, 前掲訳本, 176頁。
- (27) マルクスにおける、商品としての「労働力」範疇の生成については、高木幸二郎「『経済学批判要綱』における『資本と労働の交換』について」（経済学史学会編, 前掲書, 所収）を参照されたい。

なお、周知の如く、『資本論』では「労働力」の定義は、「吾々が労働力または労働能力と云うのは、人間の身体すなわち生きた人的存在のうちに実存して彼が何ら

かの種類の使用価値を生産するたびに運用する，肉体的および精神的な諸能力の総計のことである。」となっている。（青木文庫，第二分冊，315頁。）

- (28) ローゼンベルグ，前掲訳本，176—177頁。
- (29) ローゼンベルグ，前掲訳本，178頁。
- (30) Manuskripte. S. 158, 前掲訳本，106頁。
- (31) ローゼンベルグ，前掲訳本，179頁

### III

すでに触れたように，マルクスの資本制的領有法則の転回は，その完結された直接的叙述を，「資本論」第1巻第7篇第22章「剰余価値の資本への転化」，第1節「拡大された規模での資本制的生産過程。商品生産の所有法則の資本制的領有法則への転回」のなかにみいだすことができる。では，マルクスのいう資本制的領有法則の転回とはなにか。われわれはまず，マルクスにしたがって，その本質理解をえておかなければならない。

マルクスはいう，「商品生産および商品流通にもとづく領有法則または私的<sup>私</sup>所有法則は，それ独自の，内的な，不可避的な，弁証法によって，その正反対物に転回する。本源的<sup>本</sup>操作として現われた等価物同志の交換は，一変して，仮象的にのみ（nur zum Schein）<sup>(32)</sup>交換されるようになる。」もちろん，資本家が労働力を購買し，賃労働者が労働力を販売する，資本家と賃労働者とのこの交換関係は，商品交換の法則に照応したものであり，したがって労働力の売買は，価値どおりに行われることがここでは前提となっている。にもかかわらず，商品生産の私的<sup>私</sup>所有法則は，まさにその正反対物に転回し，交換の前提となっていた等価物同志の交換は，一転して，仮象にすぎないものとなる。

この資本制的生産の隠匿された秘密を，マルクスはつぎのように解明する。「けだし，労働力と交換された資本部分そのものは，第一には，等価なしに領有された他人の労働生産物の一部分にすぎぬのであり，第二には，その

生産者たる労働者によって填補されねばならぬばかりでなく、新たな剰余を伴って填補されねばならぬからである。つまり、資本家と労働者との交換関係は、流通過程に属する仮象にすぎぬもの、内容そのものとは無縁であって内容を神秘化するにすぎない単なる形式、となる。労働力のたえざる売買は形式である。その内容は、資本家が、たえず等価なしに領有するすでに対象化された他人の労働の一部分を、より多量の生きた他人の労働とたえず再び転態するということである。<sup>(33)</sup>

かくて、資本制的領有法則の転回の本質は、資本家による等価なしの他人労働の領有——他人労働の無償領有——にある。もとより、労働力の消費過程たる生産過程において、資本家による他人労働の無償領有は、マルクスが剰余価値論ですでにあますところなく解明していること、周知のところである。だが、商品交換の法則にもとづいているかの如くみえた、労働力の売買における等価交換の前提もまた、その正反対物たる資本家による他人労働の無償領有として、いまやここに瓦解するにいたるのである。等価交換は、たんなる仮象に一変する。つまり、剰余価値（他人労働の無償領有）——剰余資本（Surpluskapital）——の運動を循環過程として把握するやいなや、追加労働力の購売たる流通過程は、資本家にとって新たな生きた他人労働の無償領有にほかならないものとなる。他人労働の過去の領有が、いまや他人労働の新たな領有となる。こうして、資本家による他人労働の無償領有は、流通過程（労働力の売買）と生産過程（労働力の消費）の二過程を貫徹する法則となる。

マルクスは、こうした資本と賃労働の所有関係、つまり資本制的私的所有の本質を、別にこうも表現している。「本源的には所有権は自己労働にもとづくかに見えた。少くともかかる仮定が為されねばならなかった。……所有はいまや、資本家の側では他人の不払労働またはその生産物を領有する権利として、労働者の側では自分自身の生産を領有することの不可能性として、現象する。所有と労働との分離は、外観的にはそれらの同一性から生じた一



法則の必然的結果となる。」<sup>(34)</sup>

ところで、ここで銘記しなければならないことは、マルクスのいう資本制的領有法則の転回は、実はほかならぬ資本蓄積論に位置づけられているということである。<sup>(35)</sup> すなわち、資本そのものがいかにして生産されるかということ、これである。いまここで問題にしている第22章の冒頭で、マルクスは、つぎのように述べている。「いかにして剰余価値が資本から発生するかはさきに考察したので、いまや吾々は、いかにして資本が剰余価値から発生するかを考察しよう。資本としての剰余価値の充用、または剰余価値の資本への再転化は、資本の蓄積<sup>(36)</sup>と呼ばれる。」

だから、資本制的領有法則の転回は、拡大された規模での資本制的生産過程として、流通過程（労働力の売買）と生産過程（労働力の使用＝消費）との統一的把握をもってして、はじめて理解しうるものである。先に引用したマルクスの表現を使って繰返していうならば、資本制的生産過程は「いかにして剰余価値が資本から発生するか」（剰余価値）ということだけではなく、「いかにして資本が剰余価値から発生するか」（資本蓄積）ということとの、資本の運動の統一的把握を要求するものにほかならない。

ここでわれわれは、いよいよ資本制的領有法則の転回と賃労働論との関連性の検討にはいる段階にきた。ところで、資本制的領有法則の転回は、『資本論』より早く、その端初を『経済学批判要綱』にもつ。<sup>(37)</sup> そこでわれわれは、賃労働論と資本制的領有法則の転回との内的関連を考察するために、マルクスが資本制的領有法則の転回を詳述している『要綱』にその場を移そう。

マルクスは、『要綱』の「資本にかんする章」の「資本と労働との交換での二つの異なった過程」と見出しをつけた箇所、資本と労働との交換を二つの行為に分けて、つまり販売の側と購買の側から考察している。それは、以下の如くである。

「資本と労働との交換を考察すれば、それが、形式的にばかりでなく質的にも異なる、そしてそれ自体対立した次の二つの過程にわかれていることが

わかる。すなわち、——

1) 労働者は、彼の商品、労働、つまり他のすべての商品と同じように、商品としてはやはり一つの価格をもっている使用価値を、資本が彼に譲渡する一定額の交換価値、一定額の貨幣と交換する。

2) 資本家は、労働自体、すなわち価値を措定する活動としての、生産的労働としての労働を交換で手に入れる。すなわち彼は、資本を維持し倍加させ、そしてそれとともに資本の生産力、資本を再生産する力、資本自体に属する力となる<sup>(38)</sup>ところの、生産力を交換で手に入れる。」

ところで、単純な交換、流通のばあいには、この二重の過程は生じない。というのも、単純な交換では、購買した商品をどう消費するかは、まったく「流通そのものの彼岸にあること」であって、交換の「関係の形態にはなんら関係がなく」、いわば経済的関係の外にある問題だからである<sup>(39)</sup>。だが、資本と労働との交換では、事態は一変する。「反対にここでは貨幣と交換に手<sup>(40)</sup>に入れたものの一定の使い途が、この二つの過程の究極の目的をなしている。」

単純な交換と区別する、資本と労働との交換の特殊性は、したがって、購買者が購買した商品のまさに使用価値にある。購買された労働（力）、その使用価値はなにか。これはすでに先に引用したもののなかで、簡潔なかたちで提示されている。すなわち、「資本を維持し倍加させ」、同時にまた資本自体を「再生産する力」、これである。そしてこの交換の特殊性は、本来労働者に属する「生産力」から資本に属する「生産力」へ疎外していく過程である。だから、それは「資本自体に属する力」となる「生産力」である。ところで、この使用価値の実現は、「資本のがわからする労働の領有という特殊な過程」のなかで行われるのである。この特殊な過程はもはや、「質的に交換とは異なる過程であり、そしてそれは一般にある種の交換だと呼べないことはないが、それは言葉の濫用というものである。」<sup>(41)</sup>

結論を急ごう。資本によって購買された労働（力）の使用価値は、究極的には、「資本を維持し倍加」させること（剰余価値の産出）と「資本を再生

産する力」（資本蓄積）である、と規定することができる。そしてそれは、「労働の領有という特殊な過程」のなかで、資本に属する使用価値である。言葉をかえれば、資本による他人労働の領有（Aneignung fremder Arbeit）を条件としてはじめて実現する使用価値である。

しかし、この規定を与えるにあたって、われわれはいま少し、『要綱』による説明の補充を必要とする。なぜなら、前述した如く、資本と労働の交換における第一過程は、等価交換を前提としたものであり、労働（力）の使用価値が実現する条件たる、資本による他人労働の領有過程の全行程を、いまだ究明してはいないからである。われわれは、資本と労働の交換の第一過程そのものを再吟味しなければならない。

『要綱』でマルクスは、資本と労働の交換の第二の過程において、資本家による他人労働の無償領有、つまり資本家による剰余価値の領有の特質を、次の如く述べている。「労働によって生産された剰余資本——剰余価値——のうちに、同時に新しい剰余労働の現実の必然性がつくられており、またこうして剰余資本自身が、新しい剰余労働と同時に新たな剰余資本の現実的可能性でもあるのである。<sup>(42)</sup>これは、資本の側からみた特質であるが、同じことからの反面として、賃労働者の側では、剰余資本の創造を通じて、新たな剰余資本を創造する強制をおしつけられる。なぜなら、ここで創造された剰余資本は、その形成の条件自体が、資本家に属するものであり、この条件が、他人労働の新たな領有のための条件にほかならないからである。労働が自己を客体化すればするほど、その富は労働にたいして無縁な、他人の所有として対立せざるをえない。

ここで創造された剰余資本——「剰余資本Ⅰ」——は、ふたたび生産過程に投入させる。それはふたたび剰余価値を実現し、新しい剰余資本——「剰余資本Ⅱ」——となる。ところで、剰余資本Ⅱは資本家がすでに他人の労働を交換なしに無償領有していること（剰余資本Ⅰ）を前提としたものである。剰余資本Ⅱは、いまふたたび他人の生きた労働——労働力——と交換される。

だから、「他人の労働の過去の領有が、いまや他人の労働の新たな領有」<sup>(43)</sup>と  
なって現われる。

それ自身等価なしに領有された他人の労働、他人の労働の過去の無償領有が、いまやふたたび生きた労働の領有のために投入される。等価物の交換は、一転して、ただ仮象上の交換に転化する。これが、資本と労働との関係の、流通過程（労働力の売買）における関係の本質であり、法則である。かくして、「彼（資本家——引用者）がすでに資本として生きた労働に対立していたということが、彼がたんに自己を資本として維持するばかりでなく、増大しつつある資本として、ますます大量に他人の労働を等価なしにわがものとするための、言いかえるなら、生きた労働力能（Arbeitsvermögen）に対立する資本としての資本の力、その存在をおしひろげ、他方では主観的な、実体を失なった窮迫の状態にある生きた労働力能をたえず新たに生きた労働力能として生みだすための、唯一の条件として現われる。所有——過去の、すなわち客観化された他人の労働——が、現在の、すなわち生きた他人の労働をひきつづき領有するための、唯一の条件として現われる。」<sup>(44)</sup>

ここで、次のことが判然とする。すなわち、資本の運動を循環過程において認識するとき、労働力の使用価値は、換言すれば、労働力の資本制的充用の本質は、それが資本を「維持」するばかりではなく、「資本の増大」を可能ならしめるもの、として規定されるのである。そしてこのことは同時に、労働力の使用価値の規定を、まさに資本制的生産関係それ自体の再生産との関連のなかで行う必要性を意味するものといわなければならない。「労働者は自分自身を労働力能として生産し、また彼に対立する生きた労働力能を生産する。おのおのが、彼の他者を、彼の否定を再生産することによって、自分自身を再生産する。資本家は労働を無縁なものとして生産し、労働は生産物を他人のものとして生産する。資本家は労働者を生産し、労働者は資本家を生産する」<sup>(45)</sup>。

- (32) K. Marx. Das Kapital, Bd. I, Marx—Engels, Werke, Bd. 23, Dietz Verlag Berlin, 1962, S. 609. 邦訳, 青木文庫版『資本論』第4分冊, 909頁。
- (33) ibid, S, 609. 前掲訳本, 909頁。
- (34) ibid, S S. 609 — 610. 前掲訳本, 909— 910頁。
- (35) 資本制的領有法則の転回を, 資本蓄積論としてみようとする視点については, その多くを, 山田鋭夫 「マルクスにおける領有法則転回の論理」 (『思想』No. 564, 1971年6月) に学んだ。
- (36) K. Marx, op. cit, S. 605. 前掲訳本, 903頁。
- (37) K. Marx, Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie (Rohentwurf.) 1857—1858, besorgt vom Marx-Engels-Lenin-Institut, Moskau, Dietz Verlag, Berlin, 1953 高木幸二郎監訳, 『経済学批判要綱』全5冊, 大月書店, 1959年。
- (38) Grundrisse. S. 185. 邦訳, 『経済学批判要綱』II, 196頁。
- (39) Grundrisse. S. 185. 前掲訳本, 196頁。
- (40) Grundrisse. S. 185. 前掲訳本, 196頁。
- (41) Grundrisse. S. 186. 前掲訳本, 197頁。
- (42) Grundrisse. S. 359. 前掲訳本, 390頁。
- (43) Grundrisse. S. 361. 前掲訳本, 392頁。
- (44) Grundrisse. S. 361. 前掲訳本, 392頁。
- (45) Grundrisse. S. 362. 前掲訳本, 393— 394頁。

## VI

資本制的蓄積の敵対的性格は, かの古典的叙述においてすでにあますところなく分析され, 解明されている。「この章では, 資本の増大が労働者階級の運命に及ぼす影響を取り扱う」にはじまる『資本論』第1巻第7篇第23章は, 資本制的蓄積の敵対的性格を, 以下の如く表現している。すなわち, —

「だから, 資本が蓄積されるにつれて, 労働者の状態は, 彼の受ける支払がどうであろうと, 高かろうと安かろうと, 悪化せざるをえないということになるのである。最後に, 相対的過剰人口または産業予備軍をいつでも蓄積

の規模およびエネルギーと均衡を保たせておくという法則は、ヘファイストスのくさびがプロメテウスを岩に釘づけにしたよりももっと固く労働者を資本に釘づけにする。それは、資本の蓄積に対応する貧困の蓄積を必然的にする。だから、一方の極での富の蓄積は、同時に反対の極での、すなわち自分の生産物を資本として生産する階級の側での、貧困、労働苦、奴隷状態、無知、粗暴、道徳的墮落の蓄積なのである。<sup>(46)</sup>

賃労働の本質規定は、「労働者階級の運命」をその敵対的性格のなかで全容的に表現するものでなければならない。かくて、賃労働論は、剰余価値視点にもとづくばかりではなく、資本蓄積視点にもとづいて展開されるべきことが、必然的に要請されるものである。もとより、「剰余価値を生産するための方法はすべて同時に蓄積の方法なのであって、蓄積の拡大はすべてまた逆にかの諸方法の発展のための手段になるのである」から<sup>(47)</sup>。また、同じことをいま別様に表現するなら、賃労働はその本質理解において、個別的交換行為の関係として認識される剰余価値論だけではなく、資本関係＝階級関係として把握されるにいたる資本蓄積論を、その基礎としなければならない。そうした意味では、賃労働論は、一方における剰余価値視点と他方における資本蓄積視点との統一的把握をその土台に据えてこそ、はじめて構築されるものといえよう。<sup>(48)</sup>

疎外された労働の概念は、以上の如き、賃労働の方法を考察するうえで、極めて豊かな土壌を提供するものである。勿論、『経済学・哲学手稿』と『資本論』、あるいはまた『経済学批判要綱』とを平面的に比較し、その関連性を問うという方法は、あまり意味のないことである。したがって、疎外の概念を無原則的かつ機械的に経済学上の表現におきかえることはできない。ローゼンベルグの指摘をまつまでもなく、疎外された労働の概念は、当時のマルクスにあっては、後にマルクス自身が展開するにいたるいくつかの重要な経済学的視点を欠いていたのだから。

とはいえ、逆説的ないいかたをすれば、むしろ経済学的表現方法を欠いて

いたがゆえに、当時のマルクスが疎外された労働の概念を通じて、賃労働の本質をいかに表現したか、換言すれば、すでに国民経済学の批判的継承において認識しえていた賃労働の矛盾をいかに把握しようとしていたかは、新たためて問われてしかるべき問題であろう。

ところで前述した如く、ローゼンベルグはマルクスの疎外された労働の概念のなかから、特に労働生産物への労働者の「隷属」を、資本制的私的所有の特質として摘出している。そしてこれを基軸として、ローゼンベルグの疎外論は構成されている。ローゼンベルグの疎外論の一つの特徴は、マルクスのあげた疎外された労働の4規定を前二者に、つまり、類の疎外と人間の疎外を、労働の疎外と労働生産物の疎外に収斂させて展開していることである。したがって結果としては、類の疎外を労働の疎外との関連で、人間の疎外を労働生産物の疎外との関連で叙述しているわけである。そしてこれら疎外された労働を総括的に把握する方法を、労働生産物＝蓄積された他人労働への労働者の「隷属」に求めている。この関係は再生産される。マルクスは、疎外された労働の概念を通じて、資本の本質をかかるとして認識していた、というのである。

ローゼンベルグのこの指摘——マルクスが、他人労働の領有（いまだ無償労働の領有として明確に規定していなかった）と、それへの労働者の「隷属」、そしてほかならぬこうした関係の再生産に、疎外された労働の資本制的本質を、したがって資本制的労働の本質をみていた——は、当時のマルクスの賃労働観の輪郭を知るうえで、示唆に富んだものであるといわなければならない。それは第一に、「二重の意味で自由な賃労働」が内包する支配・被支配の労働形態、まさに人間の類的存在そのものを否定するにいたる敵対的労働形態を、第二には、その結果としての、人間から人間を疎外させるにいたる敵対的性格をもった富の分離、最後に、こうした関係の再生産を運命づけられた賃労働。では、なぜそうなるのか、これがマルクスの『手稿』以後の経済学的課題となるものであった。具体的には、剰余価値論と資本蓄積

論である。このことは、疎外された労働の概念が剰余価値論に解消されるものでないことをも物語るものである。むしろ、疎外された労働の概念は、剰余価値論よりも資本蓄積論への片影をとどめているといえよう。とはいえ、むしろそれは、資本蓄積論に直結するものとみることはできない。他人労働の無償領有（剰余価値）よりも、他人労働そのものの領有に、マルクスが目が注がれていたということである。この意味では、当時のマルクスが価値・剰余価値論の未確立の段階にもかかわらず、疎外された労働の概念に資本制的領有法則の転回の萌芽をみる、というローゼンベルグのかの示唆は、その正当性を認められるものである。

資本制的領有法則の転回は、先に述べたように、剰余価値視点ばかりではなく、資本蓄積視点をもその内在的論理として同時的にふくみもつものであった。資本にとつての、労働力商品の使用価値は、剰余価値産出能力を前提としつつ、究極的には資本への再転化を可能ならしめるものとして位置づけられているものである。そして、剰余価値の資本としての充用、剰余価値の資本への再転化を可能ならしめているものこそ、資本による労働そのものの領有である。賃労働の本質理解は、したがって賃労働論は、無償労働の領有としてだけではなく、無償労働の継続的領有の過程で、資本による労働そのものの領有として、あるいは少なくとも、この視点を内在的論理として堅持されていなければならない。そしてこのときはじめて賃労働論が、階級関係という支配の論理を内在化しうるものといわなければならない。かくして、疎外された労働の概念の独自の意義は、資本制的領有法則の転回の理論を介在して、賃労働論の射程範囲に位置することができるのである。

(46) K. Marx, *Das Kapital*, op.cit, S. 675. 邦訳

マルクス＝エンゲルス全集刊行委員会訳『資本論』第二分冊，大月書店  
1967年， 840頁。

(47) *ibid*, S. 674. 邦訳，前掲書， 840頁。

(48) 「賃労働の本質は労働力商品である」（荒又重雄『賃労働の理論』亜紀書房，



1968年、7頁。)とするこの規定は、賃労働論として、剰余価値視点は明確であり  
えても、資本蓄積視点が展開されえない。事実、氏は、剰余価値視点から賃労働論  
を全面的に展開している。がしかし、その理論的帰結として、労働者階級の窮乏化を  
労働力の破壊に帰着させるにいたるとき（同書、34頁。）、本節冒頭に叙述した資本  
制的蓄積の敵対的性格を説明しうる論理たりうるかどうか疑問がのこる。たしかに、  
労働力の破壊が貧困と労働苦にその端を発するにしても、むしろ、労働苦自体がま  
ずもって賃労働者にとっての問題であろう。更にその延長として、労働運動を労働  
力保全・発展のための運動としてとらえるとき、現実の労働運動における、資本の  
専制支配に対する闘争のエネルギーを説明する論理としては、一面性をまぬがれえ  
ないといわざるをえない。